

キリスト教最大のサン・ピエトロ大聖堂 バチカン市国

イタリアのローマの一角にあるバチカン市国は、ローマ教皇によって統治される世界最小の国で、その面積は東京ディズニーランドとほぼ同じ大きさである。

バチカンは巨大な建造物サン・ピエトロ大聖堂を中心に教皇宮殿・博物館・事務所・庭園などで占められ、大聖堂はカソリックの総本山、そして教皇聖座でありキリスト教最大の寺院でもある。



サン・ピエトロ広場と大聖堂

この地は古代ローマ時代バチカンの丘と呼ばれる共同墓地があったところと言われている。

暴君と伝えられている皇帝ネロは、キリスト教徒を弾圧し殺戮したが、イエス・キリストの使徒である聖ペテロ（サン・ピエトロ）も捕らえられ刑死した。言い伝えによれば大聖堂のあるこの場所はペテロが逆さ磔となって殉教した場所と伝えられている。ペテロがなぜ逆さ磔かということ、主と同じ磔では恐れ多い、私は逆さにしてもらいたいと自ら願ったのだという。

313年にキリスト教を公認したコンスタンティヌス帝は、聖ペテロが殉死したところに教会を建て、ローマ郊外のカタコンベ（共同墓地）に葬られていた聖ペテロを、改めてこの教会の地下に埋葬しなおしたのである。カタコンベはローマを取り巻く城壁の外にあったローマ人の集団墓地である。アッピア街道沿いにあるサン・セバスティアーノやサン・カッリストなどのカタコンベは有名でガイドに案内され見学ができ今や観光スポットとなっている。

カタコンベの内部は地下何層もあり狭い通路の両脇には3段～6段ほどのくぼみがあって、そこへ遺体が安置されている。中には広間もあり裕福な家系なのであろうか家族だけの墓所となっている箇所もある。

ところでバチカン市国が誕生したのは意外にもごく最近の話である。小国が競い合っていたイタリア半島が統一されイタリア王国となった時、半島にあったローマ教皇庁の領土を摂取したことによってローマ教皇庁とイタリア王国は国交断絶状態となったが、イタリア王国の独裁者となったムッソリーニが1929年ラテラノ条約を結び両者が和解しそしてバチカンは、面積は小さいが国連にも加盟する独立した国家となったのである。

壮大なサン・ピエトロ大聖堂は長年月の間に老朽化が進み、中世の頃から再建にかかり現在に見る姿となった。即ち1506年ブラマンテに始まりミケランジェロ、ベルニーニ、ラファエロな

ど建築、芸術の当代一流の巨匠達が携わり、大天蓋（クーポラ）を付け加えるなど時の教皇が改築や増築を繰り返し今に見る大聖堂を完成させたのである。

キリスト教信者は23億人と言われている。バチカン市国には全世界から信者のみならず多くの観光客も押し寄せてくるが、サン・ピエトロ大聖堂内に誘われると信者は無論のこと誰しもがその巨大さ豪華さに思わず息をのみ、知らず知らずのうちに自然と厳かな気持ちになる。



遠くにローマを睥睨する大聖堂



大聖堂の屋上はすでに90m



入場を待つ人人

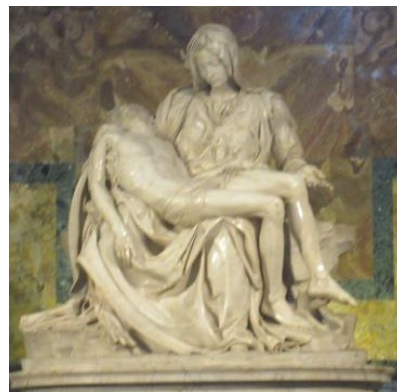
これまで目にしてきた多くの教会の祭壇の後陣の飾りつけは、十字架や磔にされたキリスト、あるいは聖母マリアの構図であるが、世界に冠たるサン・ピエトロ大聖堂の後陣は他では見たことがない鳩がオリーブの枝をくわえている図柄である。後陣の前には聖ペテロの椅子が高みに祀られている。東方正教会いわゆるギリシャ正教やロシア正教、ブルガリア正教などの祭壇は、イコノスタと呼ばれる聖人たちを描いたイコンに覆われている。同じキリスト教でも内陣は全く異なっているのである。サン・ピエトロ大聖堂の大扉をくぐり中に入ると、右手には人だかりのしている有名な彫刻がある。白亜の大理石に刻まれた聖母マリアに抱かれるイエスキリストの遺骸の構図である。ミケランジェロ



ペテロの椅子と後陣

25歳の時の作品

ピエタの像である（ピエタとは伊語で哀れみ、慈愛の意）。さらに進むと聖ペテロの像がある。右足に触れると幸福を招くといわれ、多くの人が触れていくので足の指先は摩耗し光っている。大聖堂内は彫刻や絵画が至る所にちりばめられ彩られ、また足元を見ると床は豪華にモザイクで埋め尽くされている。上を見上げると天蓋の頂から入る光は神々しい陰影となって堂内を照らしている。天蓋の真下に至ると一体これは何かと思う高さ29mの巨大なねじれた4本のブロンズの柱が聳えている。



ピエタの像



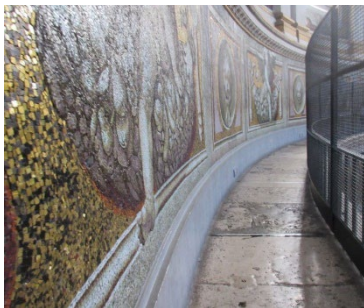
聖ペテロの像



ベルニーニ作のブロンズの天蓋で、この真下に聖ペテロの墓があり、大聖堂内で最も神聖とされているところである。
サン・ピエトロ大聖堂のクーポラはローマのどの丘からも見え抜きんでた高さを誇っているがその頂まで登れる。円蓋（クーポラ）は地上から132,5mあり天を突き抜ている。エレベーターで90mまで上がると円蓋の基部であるがそこは通路となっている。

下から見上げていたモザイク画をすぐ近くに見ながら一周できる。下を見ると遥か下に先ほど見上げたブロンズの柱が見え多くの人間が動きまわっている姿が極小に見えた。

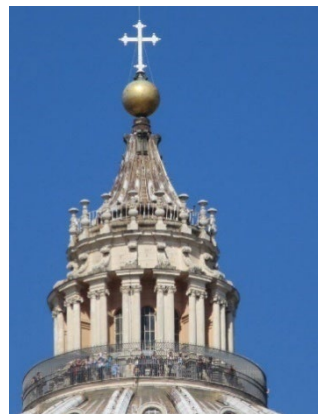
ここから丸みを帯びた円蓋に沿うようにさらに320段、体を右に傾けながら息を弾ませ徒歩で登り詰めることになる。すれ違い不可の狭い通路で一人ずつしか歩けない。登りと下りは別ルートとなっている。



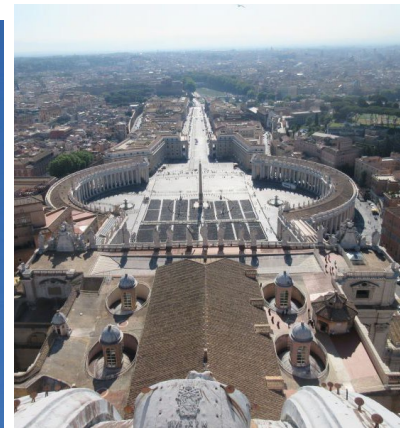
円蓋の付け根に当たる通



円蓋に沿って体も傾ぐ



クーポラの頂の人人



クーポラから見た広場

ローマーの高みから見る下界の眺めは格別だ。手入れの行き届いた緑の庭園に連なるバチカン市国全体が見渡せ、歴史に彩られたローマ市内が一望でき雄大な景観に言葉なく見惚れる。

歴代教皇の名前と年代は聖堂内のプレートに記され展示されている。初代教皇は1世紀、紀元30年の聖ペテロにまで遡る。現教皇は2013年に就任したフランシスコ教皇である。此の間の教皇を数えてみると266人に及んでいる。

バチカンには多くの礼拝堂があるが、中でもシスティーナ礼拝堂は特別である。教皇の礼拝所であり、枢機卿団によって次の教皇を選出する会議をコンクラーベというが、その会場がシスティーナ礼拝堂なのである。平素は一般に開放され、多くの信者や世界中から押し寄せる観光客でごった返している。

礼拝堂に描かれているミケランジェロの旧約聖書の創世記を題材とした天井画と大壁面に描かれた“最後の審判”の二つの大作は誰もが圧倒され言葉を忘れる。システィーナ礼拝堂はバチカン博物館見学の最終行程でもある。ここは撮影厳禁で係員が声をからし甲高い声で怒鳴っている。

待ちくたびれてやっと入場できたバチカン博物館には感動する。キリスト教の長い歴史の中で蓄積された文物・彫刻・美術工芸品が公開されている超一級の博物館で絵画や彫刻など名品が数知れず展示してあり美術愛好家ならずとも関心を大いに掻き立てられる。

見学コースは全長7kmにもおよぶそうだが、博物館は廊下と小部屋のつらなりでまるで迷路のようでしかも大勢の見学者で思うように進めないもどかしさもあり、従って時間がいくらあっても足りない。順路に従えばどん詰まりがシステーナ礼拝堂となる。



博物館の所蔵品の数はおそらく尋常な数ではあるまい。人類の至宝ともいべき展示品の数々を見るため駆け足に近い速足で駆け抜けるだけで3時間はあっという間に過ぎる。ガイドブックを片手に作品を丹念に眺めながらの見学となると何週間、何カ月もかかるに違いない。

さてバチカンと日本との関わりを概観すると、1585年天正遣欧少年使節団が教皇に拝謁、1615年伊達政宗が派遣した支倉常長ら慶長遣欧使節団が教皇に拝謁、1942年日本・バチカン市国との間で外交関係樹立、1952年外交関係再開、1966年大使交換、1981年ヨハネ・パウロ2世教皇初来日、2019年フランシスコ教皇来日、2022年日本・バチカン市国国交樹立80周年などの経緯を辿っている。此の間皇室および総理などの要人往来がある。

秘宝ラオーコーンの像



バチカンの衛兵の制服

バチカン市国は軍隊を持ってないが、1505年ユリウス教皇が創設して以来バチカンの警備に当たっているのは伝統的にスイス人である。彼らはミケランジェロがデザインしたと伝えられている特色のある目立つ制服を着用している。

大聖堂の前に広がるサン・ピエトロ広場は30万人を収容できる広さがあり通常思い浮かべる広場の概念とは桁が違い巨大である。広場は284本の巨大な白亜の柱に囲まれている。柱の根元にたたずんでみると想像以上に巨大である。一本の柱は二人か三人で手をつなぐほどの太さがある。サン・ピエトロ広場はベルニーニの着想により神がすべてを抱くよう列柱に囲まれているのである。広場の真ん中には噴水とエジプトから運ばれたオベリスクが建っている。

カソリックには25年ごとに聖年と呼ばれるローマ巡礼者に特別の赦しを与える年が巡ってくる。サン・ピエトロ大聖堂正面には5つの大扉があるが、右端の大扉は普段は固く閉ざされているが、聖年に当たる年には教皇自らが開け信者はこの扉をくぐって入る。

聖年のしきたりは同じキリスト教でもカソリックのみで、プロテスタントにはない。聖年に当たる年には世界中から信者が押し寄せ大変な混雑で加えて昨今のテロに対する警戒などで大聖堂への入場には2時間待ちも珍しくない。



テベレ河畔のサンタンジェロ城

ローマ市内を貫いているテベレ川の右岸には、2世紀にハドリアヌス帝がローマ皇帝の霊廟として建築した円形のサンタンジェロ城が聳えている。

バチカンから徒歩でもいくらかもない。長い歴史の中で時には要塞としての役割を担うなどさまざまに使われてきている。教皇の避難先としてバチカンと直結した通路が設けられて

いる内部は見学できるが屋上から足下の滔々と流れるテベレ川を見ると悠久のローマの越し方を誰しも思い浮かべるに違いない。



ローマのマルタ騎士団長邸



大聖堂を囲む太い柱の鍵穴から見える大聖堂

余談であるが、バチカンの近くにモザイク店があった。古代ローマの遺跡はどこを訪れてもモザイク画を目にするが、床や壁に描かれたモザイク画はモノトーンのものからカラフルなものまでさまざまである。

無論手に入るモザイクは古代のものではなく現代の人が作成したものである。価格を聞いて驚いた。A-4程度の大きさに100万円~200万円というのである。展示してあった作品は全てバチカンの工房で作成したものである



遺跡や博物館、教会にあったモザイク画

とのこと見事な出来栄ではあるが手が出なかった。

先年訪れたルーマニアは、寒村に至るまで小さなキリスト教の教会が沢山ある。信仰が厚いのだろう。首都ブカレストの「民族博物館」を訪れたとき地下に顔写真を沢山張り付けた大きなパネルがあった。よく見るとルーマニア全土にある教会に祀られ飾られているキリストの顔を写真に撮って集めたものである。神々しい顔、下卑た顔、薄ら笑いの顔、悲しそうな顔、悪党面の顔、いかめしい顔、上品な顔などまことにさまざまである。貧しい村の教会は絵心もない素人が一生懸命描いたのだろう。キリスト様の顔が200も並べて様々な表情を見せていることに大いに興味を抱き一つひとつ丹念に眺めたものである。